

様式6 (第15条第1項関係)

平成29年4月1日

独立行政法人
日本学術振興会理事長 殿

研究機関の設置者の所在地	〒183-8584 東京都府中市朝日町3-11-1	
研究機関の設置者の名称	国立大学法人東京外国語大学	
代表者の職名・氏名	学長・立石 博高 (記名押印)	
代表研究機関名及び機関コード	東京外国語大学	12603

平成28年度戦略的国際研究交流推進事業費補助金
実績報告書

戦略的国際研究交流推進事業費補助金取扱要領第15条第1項の規定により、実績報告書を提出します。

整理番号	J2601	補助事業の完了日	平成29年3月31日	関連研究分野 (分科細目コード)	ヨーロッパ史・アメリカ史 (3304)
補助事業名 (採択年度)			補助金支出額 (別紙のとおり)		
境界地域の歴史的経験の視点から構築する新しいヨーロッパ史概念 (平成26年度)			25,190,000円		

代表研究機関以外の協力機関
なし

海外の連携機関：国際文化センター (クラクフ、ポーランド)、欧州大学院大学歴史文明学部 (フィレンツェ、イタリア)、中央ヨーロッパ大学 (ブダペシュト、ハンガリー)

1. 事業実施主体

フリガナ 担当研究者氏名	所属機関	所属部局	職名	専門分野
主担当研究者 シノハラ 琢 篠原 琢	東京外国語大学	大学院総合国際学研究院	教授	中央ヨーロッパ近現代史
担当研究者 カナイ コウタロウ 金井 光 太郎	東京外国語大学	大学院総合国際学研究院	教授	アメリカ合衆国史
千葉 トシユキ 敏之	東京外国語大学	大学院総合国際学研究院	教授	ヨーロッパ中世史
ソウマ ヤスオ 相馬 保夫	東京外国語大学	大学院総合国際学研究院	教授	ドイツ現代史
ハヤシ カヨコ 林 佳世子	東京外国語大学	大学院総合国際学研究院	教授・副学長	オスマン帝国史
タツミ ユキコ 巽 由樹子	東京外国語大学	大学院総合国際学研究院	講師	ロシア近代史
計6名				

フリガナ 連絡担当者	所属部局・職名	連絡先 (電話番号、e-mailアドレス)
ナカムラ ヨウイチロウ 中村 洋一郎	研究協力課研究協力係・係長	TEL: 042-330-5593 E-mail: kenkyu-kenkyo@tufs.ac.jp

※2頁以降は、交付決定を受けた時点の事業計画の項目に合わせて必要に応じて修正すること。

2. 本年度の実績概要

本年度は事業計画の最終年度にあたり、研究活動を継続して進めるとともに、二年半の研究成果を確認する総括会議の実現に力を注いだ。若手研究者の派遣は順調に進み、中央ヨーロッパ大学に派遣した2名、および欧州大学院大学に派遣された1名が研究活動を予定通り終えて帰国した。年度別には26年度に3名、27年度に5名が派遣され、28年度は3名が27年度に引き続き、連携研究機関での研究を継続した。招聘については26年度が2名（中央ヨーロッパ大学と欧州大学院大学から各1名）、27年度は計8名が招聘されたのに続き、本年度は中央ヨーロッパ大学からのべ4名が、欧州大学院大学からのべ3名が招聘された。派遣研究者、招聘研究者それぞれの研究活動実績については、本実績報告書の第4項から第6項を参照されたい。派遣で特筆すべきは、若手研究者が本研究事業の課題を果たすべく個々の研究を推進したことに加えて、連携機関での長期滞在によって、研究上の国際的ネットワークを構築したことである。東京外国語大学を中核として、国際文化研究センター（ポーランド）、中央ヨーロッパ大学（ハンガリー）、欧州大学院大学（イタリア）の三機関が、有機的に研究活動を結びつけ、共同研究を行う体制が構築されたことは重要な意味を持つ。

本年度の重要な事業活動は、本学で行われた国際会議、「帝国とナショナリズム」（5月）、国際文化センターと共同で行われた国際移動セミナー「ヨーロッパ境界地域の共有遺産研究：シロンスク/シュレージエン/スレスコ」（8-9月）、および東京外国語大学で行われた総括会議「ヨーロッパ史における中心・周縁再考」（2月）の3つである。「帝国とナショナリズム」は、従来、対抗的に考えられてきた「帝国」という枠組みとナショナリズム運動との相補・相関関係に光をあて、本研究の進展に大きく貢献した。国際移動セミナーは、国際文化センターのヤツェク・プルフラ所長、連携研究者のM.ヴィシニェフスキ博士、L.ガルセク博士、東京外大から4名の若手・共同研究者の参加を得て、10日間にわたって実施された。「境界地域」という概念をより洗練させることができた点で、本研究計画を方法論的に総括するのに非常に貴重な事業であった。総括会議は本学より3本、欧州大学院大学より2本、中央ヨーロッパ大学より3本の学術報告を得て、ヨーロッパ史を構成する概念を再検討し、新たな叙述の方向性を見出そうとする本研究計画の目的に十分に接近することができた。この総括会議では、ヨーロッパ史の概念を再考するという課題ののちに、世界史の新しい叙述法を検討する、という本事業を発展させた次の事業課題の見通しも示された。このほか、本学で2回、および神戸大学、京都大学で各1回、欧州大学院大学で2回、個別研究の成果を確認・公表する国際セミナーが行われた。国内の他大学で行われたセミナーは、本研究事業に、関連する国内の研究者の参加を促し、研究ネットワークを拡大・充実させることに役立った。

個別研究の進展のなかで、近世の知と経験の循環を立体的に検討するために新たな史料群の利用が試みられたことや、民衆世界におけるナショナリズムの問題を考えるために、従来利用されていなかった史料群を用いた研究が進展したことも大きな成果だった。

総じて、日本側研究者と連携研究機関の研究者の研究報告を通じて、研究上の相互交流が実現しただけでなく、研究事業計画全体の問題関心を連携研究機関の研究者と共有し、研究ネットワークの拡大・深化をはかることができた。この成果は、中央ヨーロッパ大学、国際文化センターとの学術協定の締結、欧州大学院大学との学術協定の準備によって、恒久的な研究ネットワークの構築の基礎となり、日本の歴史研究の成果を国際的な水準で推進する基盤となるだろう。

3. 到達目標に対する本年度の達成度及び進捗状況

本研究は、東部ヨーロッパ、および地中海地域を中心とするヨーロッパ境界地域の歴史的経験に焦点を当てながら、共同研究によって新たなヨーロッパ史の概念を構築することを目的として掲げ、従来のヨーロッパ研究の問題点として次の三点をあげた。

1. 目的論的歴史像：ヨーロッパ史の発展は、普遍的な人類史的価値の実現を体現するものとして目的論的に構想されてきた。2. 国民的学術研究の束：ヨーロッパでは19世紀の半ば以降、学術研究、特に人文社会科学研究は国民国家／国民社会のプロジェクトとして制度化、組織化され、それぞれに精緻な知の体系を築きあげてきた。ヨーロッパ研究は、国民的学知の束として構成された。3. 東と南の境界地域の排除：ヨーロッパ研究は西欧社会を中心に構想され、東と南の境界地域の経験はヨーロッパ研究に組み込まれなかった。

こうした問題意識に立ちながら、ヨーロッパ史の新しい構想を構築することが本事業の研究目的である。招聘・派遣を軸に国内外での合計5回にわたって国際会議・ワークショップを開催し、またポーランド・チェコ・ドイツにまたがって大規模な国際移動セミナーを実施したが、本年度は、個別研究の進展の上に、上記の三点を批判的に検討して、ヨーロッパ史概念を再考しようとする全体像が示された。初年度は、主に日本側の研究者と連携研究機関の研究者との個別の交流を基礎に研究協力が行われる段階、二年度は、研究事業の全体像が連携研究機関の研究者にも共有され、研究の積み上げが可能となり、かつ研究機関どうしの面的な研究協力が進んだ段階、そして最終年度は、研究事業全体が共有され、研究成果があげられた段階として総括することができる。特に2月に本学で行われた国際会議は、上にあげた課題を正面から取り上げながら世界史叙述のなかでのヨーロッパ史の中心性を批判的に検討し、近世、19世紀史、現代史のそれぞれのセクションで成果が発表されるとともに、豊かな議論が行われ、研究上の次の課題が示された。また、国際移動セミナーは、研究チームが移動しながら、各地の研究者とセミナー・会議を重ねていくもので、宗派・言語・国境が錯綜した地域の現場で、研究を鍛えていくことができたのは大きな成果であった。歴史研究者以外にも、地域の宗教指導者や、文化財保全の研究・実務担当者などとの交流によって、本研究事業の現代性を確認できたことも重要である。移動セミナーは当初計画以上に大きな研究の進展をもたらした。

本事業は、事業目的として、トランスナショナルなヨーロッパ史研究を推進するためのコンソーシアムの形成をあげたが、三年間の事業期間を通じて、連携研究機関3機関と本学との総合的な事業が継続的に実現したことで、コンソーシアム形成の合意が得られた。なお、研究成果の公開について、英文の論集を準備中である。

本年度、「実績概要」に示したように、期待した以上に本事業全体の成果の総括を行うことができ、三年間の事業期間を通じて、個別研究の面でも、研究ネットワークの構築の面でも、計画以上の成果をあげることができた。

昨年度に引き続き、各種の国際会議、および若手研究者を中心とする共同研究のなかで、ヨーロッパ史に集中していた国外の連携研究者の研究関心を、グローバル史、および非ヨーロッパ世界との比較史に開いていったことは、大きな成果であった。2017年2月の総括会議では、明示的に比較史の課題が示され、ヨーロッパ史、日本史、アジア史を、「中心・周縁」の図式でなく、相互に「接続する歴史」として理解する枠組みの必要性が確認された。本研究の研究課題は、ヨーロッパ史の再考にあるが、それを日本の人文科学の伝統から問い直すことが重要であり、本事業を通じて、国外研究者にも大きな知的成果をもたらしたものだといえる。以上、本事業は、全体として、計画以上に進展したと総括できる。

4. 日本側研究グループ（実施主体）の研究成果発表状況（本年度分）

①学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文又は著書

論文名・著書名 等	
<p>（論文名・著書名、著者名、掲載誌名、査読の有無、巻、最初と最後の頁、発表年（西暦）について記入してください。）（以上の各項目が記載されていれば、項目の順序を入れ替えても可。）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・査読がある場合、印刷済及び採録決定済のものに限って記載して下さい。査読中・投稿中のものは除きます。 ・さらに数がある場合は、欄を追加して下さい。 ・著者名について、責任著者に「※」印を付してください。また、主担当研究者には<u>二重下線</u>、担当研究者については <u>下線</u>、若手研究者については <u>波線</u> を付してください。 ・海外の連携機関の研究者との国際共著論文等には、番号の前に「◎」印を、また、それ以外の国際共著論文等については番号の前に「○」印を付してください。また、主要連携研究者については<u>斜体・太下線</u>、連携研究者については<u>斜体・破線</u>としてください。 	
1	篠原 琢「『ユダヤ文化』の復興？-ポーランドにおける多文化社会社会の再構築の試み」、長谷部美佳・受田宏之・青山亨編著、『多文化社会読本』、東京外国語大学出版会、2016年4月、pp.56-74、査読なし
2	篠原 琢「市民社会」、南塚信吾・秋田茂・高澤紀恵責任編集『新しく学ぶ西洋の歴史——アジアから考える』ミネルヴァ書房、2016年、131-132頁、査読なし
3	篠原 琢「ネーション」、南塚信吾・秋田茂・高澤紀恵責任編集『新しく学ぶ西洋の歴史——アジアから考える』ミネルヴァ書房、2016年、156-157頁、査読なし
4	篠原 琢「ヨーロッパ史をどう書くか、20世紀史をどのように描くか—マーク・マゾワの著作をめぐって—、『歴史学研究』946号、2016年10月、55-61、64頁、査読なし
5	相馬保夫「離散と抵抗：ズデーテン・ドイツ社会民主党亡命組織（17）」、『東京外国語大学論集』93号、2016年12月、111-129頁、査読なし
6	金井光太郎「国民国家アメリカの創造とプリマスの記憶の神話化」、『クアドランテ』、19号、2017年3月、頁数未定、査読あり
7	金井光太郎「アメリカ共和政の試練——人民の同意と主権者人民」、遠藤泰生編『近代アメリカの公共圏と市民——デモクラシーの政治文化史』、東京大学出版会、2017年、頁数未定、査読なし
8	福嶋千穂「スラヴとバルトの混交域——古ルーシの諸公国とリトアニア大公国」、服部倫卓・越野剛編『ベラルーシを知るための60章』（仮題）、明石書店、2017年刊行予定、頁数未定、査読なし
9	福嶋千穂「両国民の共和国」の時代——ポーランド・リトアニア国家のもとで」、服部倫卓・越野剛編『ベラルーシを知るための60章』（仮題）、明石書店、2017年刊行予定、頁数未定、査読なし
10	鈴木健太「独立への過程と「十日戦争」」、柴宜弘、アンドレイ・ベケシュ、山崎信一編『スロヴェニアを知るための60章』、明石書店、2017年刊行予定、頁数未定、査読なし
11	鈴木健太「書評：マーク・マゾワ著／中田瑞穂・網谷龍介訳『暗黒の大陸——ヨーロッパの20世紀』（未来社、2015年12月）」、『東欧史研究』（東欧史研究会）、39号、2017年3月刊行予定、頁数未定、依頼

12	伊東剛史「痛みは普遍的なのか——『痛みと感情のイギリス史』から考える」、『 <i>pieria</i> (ピエリア)』、8号、2017年4月、pp. 64-65、査読なし
○ 13	Takashi ITO, “Flying penguins and soaring seals: “the cult of the cute” in Japan’s northernmost zoo,” Tracy McDonald and Daniel Vandersommer (eds), <i>Zoo studies and a new humanities</i> , Toronto: Toronto UP, forthcoming, 査読
14	伊東剛史「【書評】 Sarah Amato, <i>Beastly Possessions: Animals in Victorian Consumer Culture</i> , Toronto: University of Toronto Press, 2015」『ヴィクトリア朝文化研究』、14号、2016年11月、70-72頁、査読なし
15	伊東剛史「【書評】 勝田俊輔・高神信一（編）『アイルランド大飢饉——ジャガイモ・「ジェノサイド」・ジョンブル』（刀水書房、2016年）」、『科学史研究』281号、2017年4月、70-72頁、査読なし
16	Rin ODAWARA, “Violence against women and the racist discourse during the WWI in Italy,” 『 <i>クアドランテ</i> 』、19号、2017年3月、頁数未定、査読あり
17	小田原琳「〈境界〉を創りだすカー——南イタリアから立てる近代への問い」、東京歴史科学研究会編『歴史を学ぶ人々のために——現在をどう生きるか』、岩波書店、2017年3月、203-221頁、査読
18	小田原琳・後藤あゆみ訳、シルヴィア・フェデリーチ著『 <i>キャリバンと魔女</i> 』、以文社、2017年2月
19	小田原琳「平和の犯罪」としての戦時・植民地主義ジェンダー暴力——イタリア歴史学における研究動向』、『 <i>ジェンダー史学</i> 』、12号、2016年10月、81-91頁、査読あり？
20	小田原琳「経験の後に書かれる歴史へ——イタリア歴史学におけるレジスタンス神話と修正主義」、『 <i>日本の科学者</i> 』、51号、2016年8月、30-35頁、査読
21	久米順子「西ゴート王国（1）アリウス派時代」「西ゴート王国（2）カトリック時代」、立石博高、内村俊太編（久米ほか11名著）『 <i>スペイン史を知るための50章</i> 』、明石書店、2016年10月、33-44頁、査読なし
22	Junko KUME, “Reconsideraciones del arte medieval español durante el siglo XX: lo «mozárabe» y lo «mudéjar»,” M. Cabañas Bravo, W. Rincón García (eds), <i>El arte y la recuperación del pasado reciente</i> , Madrid, 2016, pp. 123-132, 査読なし
23	久米順子「中南米の西洋中世学」、『 <i>西洋中世研究</i> 』、8号、2016年12月、229-242頁、査読あり
24	久米順子「ロマネスク壁画の収集・保全とカタルーニャ美術館」、木下亮編著『 <i>バルセロナ——カタルーニャ文化の再生と展開</i> 』（西洋近代の都市と芸術第6巻）、竹林舎、印刷中、頁数未定、査読なし

25	<u>Junko KUME</u> , G. Rodríguez, M. Zapatero, “Historia y Memoria”, Scriptorium (Pontifica Universidad Católica Argentina), 10 (2016), pp. 36-40, 査読なし
26	久米順子訳、イサーク・アイト・モレーノ著『『美術館』の芸術家たち——ベラスケスと20世紀の美術におけるその影響』、豊田唯、坂本龍太編『ベラスケスとバロック絵画：影響と同時代性、受容と遺産：公開国際シンポジウム報告集』、ベラスケスシンポジウム事務局：早稲田大学文学学術院美術史コース室、2016年11月、63-68頁
27	久米順子「トルデシーリャス再訪」、『地中海学会月報』、396号、2017年1月、5頁、査読なし

②学会等における発表

発表題名 等	
<p>(発表題名、発表者名、発表した学会等の名称、開催場所、口頭発表・ポスター発表の別、審査の有無、発表年月(西暦)について記入してください。)(以上の各項目が記載されていれば、項目の順序を入れ替えても可。)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表者名は参加研究者を含む全員の氏名を、論文等と同一の順番で記載すること。共同発表者がいる場合は、全ての発表者名を記載し、責任発表者名は「※」印を付して下さい。発表者名について主担当研究者には<u>二重下線</u>、担当研究者については<u>下線</u>、若手研究者については<u>波線</u>を付して下さい。 ・口頭・ポスターの別、発表者決定のための審査の有無を区分して記載して下さい。 ・さらに数がある場合は、欄を追加して下さい。 ・海外の連携機関の研究者との国際共同発表には、番号の前に「◎」印を、また、それ以外の国際共同発表については番号の前に○印を付して下さい。また、主要連携研究者については<u>斜体・太下線</u>、連携研究者については<u>斜体・破線</u>としてください。 	
1	<u>Taku SHINOHARA</u> , “Europe as a canon and obsession in its borderlands,” 本事業主催国際ワークショップ「Deconstructing and Negotiating Center and Periphery in European History」, 東京(東京外国語大学府中キャンパス), 2017年2月, 口頭発表, 審査なし
2	<u>Taku SHINOHARA</u> ”Defining public sphere by organic boundaries: Syncretism in creating national culture in 19th century Habsburg Monarchy”, 欧州大学院大学歴史文明学部、2017年12月5日、口頭発表、審査なし
3	<u>Taku SHINOHARA</u> ”Transformation of Barok Festivity into National Culture in Nineteenth Century Bohemia”, Entangled Interactions between religions and national identities in the space of the former Polish-Lithuanian Commonwealth (2016年8月22-23日), リトアニア歴史学研究所(ヴィリニユス、リトアニア)、口頭発表、審査なし
4	福嶋千穂「17世紀ポーランド・リトアニアにおける殉教事件」、東欧史研究会2016年度第2回例会、2016年7月、東京(東京外国語大学本郷サテライト)、口頭発表、審査なし
5	<u>Chiho FUKUSHIMA</u> , “Uniate martyr Josaphat and His Role as a Confessionalizing/Nationalizing Element,” Summer International Symposium 2016 in Vilnius “Entangled Interactions between Religions and National Identities in the Space of the Former Polish-Lithuanian Commonwealth,” 2016年8月, Lithuanian Institute of History (ヴィリニユス、リトアニア), 口頭発表, 審査なし
6	<u>Chiho FUKUSHIMA</u> , “Unia kościelna w Rzeczypospolitej Obojga Narodów i jej ślady w dzisiejszej Polsce,” Spotkania polonistyk trzech krajów - Chiny, Korea, Japonia: V Międzynarodowa Konferencja Akademicka 2016 Kanton, 2016年11月, 広東外語外貿大学(広州、中国), 口頭発表, 審査なし

7	鈴木健太「1980年代末ユーゴスラヴィアの大衆運動の展開と構図——セルビアとスロヴェニアにおける事例の比較とナショナリズムの再検討」、第66回日本西洋史学会大会自由論題報告、東京（慶応義塾大学）、2016年5月、口頭発表、審査あり
8	鈴木健太「1980年代末ユーゴスラヴィアにおける政治社会の変動と連邦党指導部——大衆運動とナショナリズムをめぐる相違と対立」、第6回特別研究員研究会（東京外国語大学海外事情研究所）、東京（東京外国語大学府中キャンパス）、2016年12月、口頭発表、審査なし
9	Kenta SUZUKI, “Yugoslavia and the collapse of communism in Eastern Europe: Mass movements and the intra-party confrontations in the socialist federation in late 1988,” 本事業主催国際ワークショップ「Deconstructing and Negotiating Center and Periphery in European History」, 東京（東京外国語大学府中キャンパス）, 2017年2月, 口頭発表, 審査なし
10	伊東剛史「19世紀のロンドン動物学協会からみた動物学の専門分科」、化学史研究発表会（年会）シンポジウム「近代イギリスにおける科学の制度化——専門分科と公共圏」、津（三重大学）、2016年7月、口頭発表、審査なし
11	伊東剛史「歴史的に読み解く「英国 EU 離脱」」、東京外語会主催文化講演会、東京（東京外国語大学本郷サテライト）、2016年10月、招待講演
12	Takashi ITO, “The secrets of beastly business: economy, industry and animal life in Japan’s Northernmost zoo,” Zoo Studies Workshop “Thinking With Human and Nonhuman Animals: Zoo Studies and a New Humanities,” McMaster University（ハミルトン、カナダ）, 2016年12月, 口頭発表, 審査なし
13	Takashi ITO, “Penguin Parade and Flying Seals: “The Cult of the Cute” in Japan’s Northernmost Zoo,” Panel on “Zoos and global history,” 131st Annual Meeting, American Historical Association, デンバー（アメリカ合衆国）, 2017年1月, 口頭発表, 審査なし
14	Takashi ITO, “Postmodern nature in Japan’s northernmost zoo,” 本事業主催国際ワークショップ「Deconstructing and Negotiating Center and Periphery in European History」, 東京（東京外国語大学府中キャンパス）, 2017年2月, 口頭発表, 審査なし
15	Takashi ITO, “Playing by their own rules: gentleman menageries and the Zoological Society of London in Victorian Britain,” International Workshop on the Institutionalisation of Science and the Public Sphere in Modern Britain, 愛知（愛知県立大学）, 2017年3月, 口頭発表, 審査なし
16	Rin ODAWARA, “Comment on Lucy RIALI, “How Global was European Colonialism?,” 本事業主催国際ワークショップ「Deconstructing and Negotiating Center and Periphery in European History」, 東京（東京外国語大学府中キャンパス）, 2017年2月, 口頭発表, 審査なし
17	小田原琳「シルヴィア・フェデリーチ『キャリバンと魔女』を読む」、ワークショップ「魔女とナウトピア——脱資本主義のパラレルワールド」、東京（東京外国語大学府中キャンパス）、2017年2月、口頭発表、審査なし
18	Rin ODAWARA, “La divisione del lavoro di genere e la nuova strategia dei lavoratori stranieri in Giappone,” “Generi a colori: proposte formative per comunità multiculturali,” Biblioteca Comunale（コモ、イタリア）, 2016年5月, 口頭発表, 審査なし
19	Junko KUME, “How to name the past: Some debates in Modern Spain about Medieval Art History”, Department of History and Civilization colloquium “Art politics and art history in 20th century Spain,” 欧州大学院大学（フィレンツェ）、2016年12月、口頭発表、審査なし
20	Junko KUME, “El ‘Arte mudéjar’ en la historia del arte español: en busca de una identidad,” XVIII Jornadas Internacionales de Historia del Arte ‘Imaginarios en conflicto: “Lo español” en los siglos XIX y XX,’ スペイン高等科学研究所（マドリード）、2016年9月、口頭発表、招待

21	Junko KUME, “Donde viven los monstruos. Miradas desde el rincón,” Summer Course, XXI Cátedra de los estudios medievales del Comtat d’Urgell, バラゲー (リエイダ県ノゲーラ郡、スペイン) 2016年7月, 講演, 招待
22	Junko KUME, “Formation and Development of the Historiography of ‘Mudéjar Art’ in Spanish Art History,” The 6th International Medieval Meeting Lleida, リエイダ大学 (リエイダ、スペイン), 2016年6月, 口頭発表, 審査あり
23	<u>Pavel KOLÁŘ</u> , “Communism: Centre or Periphery of European History?,” 本事業主催国際ワークショップ「Deconstructing and Negotiating Center and Periphery in European History」, 東京 (東京外国語大学府中キャンパス), 2017年2月, 口頭発表, 審査なし
24	<u>Balázs TRENCSENYI</u> , “What can We Learn from the Conceptual History of European Meso-regions?,” 本事業主催国際ワークショップ「Deconstructing and Negotiating Center and Periphery in European History」, 東京 (東京外国語大学府中キャンパス), 2017年2月, 口頭発表, 審査なし
25	<u>Pieter JUDSON</u> , “How Empire and Nation Created Each Other,” 本事業主催国際会議「帝国とナショナリズム—19世紀における国民形成再論」, 東京 (東京外国語大学本郷サテライト), 2016年5月, 口頭発表, 招待
26	<u>Pieter JUDSON</u> , “New Approaches to the History of the Habsburg Empire,” 本事業主催国際セミナー, 東京 (東京外国語大学本郷サテライト), 2016年5月, 口頭発表, 招待
27	<u>Lucy RIALI</u> , “Global Europe in the Age of Empire,” 本事業主催国際会議「帝国とナショナリズム—19世紀における国民形成再論」, 東京 (東京外国語大学本郷サテライト), 2016年5月, 口頭発表, 招待
28	<u>Lucy RIALI</u> , “How Global was European Colonialism?,” 本事業主催国際ワークショップ「Deconstructing and Negotiating Center and Periphery in European History」, 東京 (東京外国語大学府中キャンパス), 2017年2月, 口頭発表, 審査なし
29	<u>Matthias RIEDL</u> , “Does Europe have a Centre? The Debate on “Eccentric Culture”,” 本事業主催国際ワークショップ「Deconstructing and Negotiating Center and Periphery in European History」, 東京 (東京外国語大学府中キャンパス), 2017年2月, 口頭発表, 審査なし
◎ 30	<u>Jan HENNINGS</u> , “Centres Beyond the Periphery: The First Russian Resident Embassy in Istanbul in the Early Eighteenth Century,” 本事業主催国際ワークショップ「Deconstructing and Negotiating Center and Periphery in European History」, 東京 (東京外国語大学府中キャンパス), 2017年2月, 口頭発表, 審査なし

5. 若手研究者の派遣実績 (計画)

【海外派遣実績 (計画)】

年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	合計
派遣人数	3人	5人 (3人)	3人 (3人)	5人

※当該年度は実績、次年度以降は計画している人数を記載

【本年度の海外派遣実績】

派遣者④の氏名・職名：小田原琳・講師

(当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

本プログラムでの個人的な研究主題は、ヨーロッパの南の境界としての近代イタリアにおける人種とジェンダーをめぐる歴史叙述である。この課題には、(1)植民地主義、(2)人種主義、(3)ジェンダーという、近代ヨーロッパにおけるきわめて大きな3つの論点が交差している。

イタリアの植民地主義については、戦後長らく一部の研究者をのぞいて活発な生産が行われているとは言い難い分野であったが、英語圏でのポストコロニアル・スタディーズなどの影響を受け、イタリアでも非常に重視されつつある分野である。EUI では近代ヨーロッパの植民主義を通してのグローバル化をめぐる研究を進めるルーシー・ライオル教授と研究を推進し、帝国主義以前の植民者たちの活動や、美術品など物の流通を通じての植民地主義理解、植民地主義とグローバル・ヒストリーという歴史叙述の可能性の関係、またイタリア近現代史における文学や美術における「国民」の表象と人種主義の関係などの論点を議論することができた。とくに人種主義は、ヨーロッパにおける今日の大規模な移民現象や難民危機を契機として注目を浴びている分野だが、イタリアでは十分な蓄積があるとは言えない。この点で、EUI 派遣を通じて直接学び対話することができたことは貴重であった。

このように、植民地主義、人種主義に関する研究が発展しつつある一方で、それと密接に関わり交差するジェンダーの問題については、まだ十分な議論がされているとは言えないことが、共同研究を遂行するなかで発見された。植民地主義や人種主義をめぐる言説空間で、女性が、その生殖機能ゆえに人種の「境界」上にある、「危険な存在」と見なされてゆくこと、またそれがどのような現実として結実してゆくかについては、歴史研究においてはまだ十分に指摘・検討されていない論点である。この点では、ライオル教授だけでなく、パヴェル・コラーシ教授やピーター・ジャドソン教授、また CEU のバラージュ・トレンチャーニー教授とも、今後の共同研究に向けて研究交流を密に行なった。

とりわけ第一次世界大戦は、参戦運動等を通じて女性が「国民化」されると同時に、「敵」による性暴力の被害者となることで、逆説的にイタリア国民という「人種」に害をおよぼす存在として「人種化」されるという二重の意味を付与される契機となった。このことは植民地における宗主国イタリアの男性たちと現地女性との関係や、第二次世界大戦末期の連合軍やドイツ軍によるイタリア女性に対する加害とその後など、きわめて長い視野をもちうる問題であることが明らかになったことは、本プログラムの大きな成果であり、また今後の課題である。これを遂行するにあたり、上述の研究者たちとの持続的な研究ネットワークの形成はきわめて大きな意義があった。このネットワークの維持・発展も、合わせて今後の課題としたい。

(具体的な成果)

上述の成果の一部は、Rin Odawara, 'Violence against women and the racist discourse during the WWI in Italy' in *Quadrante*, No. 18, March 2017 および小田原琳「〈境界〉を創りだす力--南イタリアから立てる近代への問い」東京歴史科学研究会編『歴史を学ぶ人々のために--現在をどう生きるか』（岩波書店、2017年）として発表した。

派遣先

派遣期間

(国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	合計
イタリア・欧州大学院大学・歴史文明学部 ・ルーシー・ライオル教授	0 日	196 日	148 日	344 日
米国・ニューヨーク、ニューヨーク大学(ワークショップ) およびフォーダム大学(意見交換)	0 日	4 日	0 日	4 日
ヨーロッパ・ポーランド、国際文化センター、共同セミナー「Europe Seen from Abroad」	0 日	2 日	0 日	2 日
ヨーロッパ・ハンガリー、中央ヨーロッパ大学、国際会議「The Violence of Memory and the Memory of Violence」	0 日	4 日	0 日	4 日
ヨーロッパ・フランス・パリ社会学政治学研究センター(研究打合せ、史料調査)	0 日	0 日	2 日	2 日
ヨーロッパ・フランス・イスラーム文化センター(研究打合せ・史料調査)	0 日	0 日	1 日	1 日
ヨーロッパ・オーストリア・ウィーン大学(研究打合せ、史料調査)	0 日	0 日	2 日	2 日

派遣者⑥の氏名・職名：久米順子・准教授

(当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

ヨーロッパ中世美術史を専門とする立場から、画像史料を有効に用いつつ、ヨーロッパ境界地域、とりわけ中世地中海地域における歴史的経験の循環を明らかにすることを目標としている。具体的には、1)キリスト教世界とイスラーム世界の接触が中世地中海地域の美術・建築にどのような影響を及ぼしたか、2) そうした現象が近現代のヨーロッパで構築された「美術史」の言説においてどのように語られてきたか、という2つの観点から作品および先行研究の収集と分析を行うこととした。

2016年3月にフィレンツェの欧州大学院大学の歴史文明学科に到着し、Visiting Fellowとして一年間受け入れてもらった。滞在中はおもに同大学図書館と、フィレンツェ市内にあるドイツ美術史研究所図書館を使って研究を行った。英語を公用語とする欧州大学院大学図書館は、JSTOR, ProQuest など英語圏の主要な学術雑誌のデータベース類が非常に充実しており、欧州の境界地域とくに地中海地域における芸術的モチーフの還流について、もっぱら英語で発表された近年の論文を渉猟するために理想的な環境であった。ドイツ美術史研究所は、対照的に、言語を問わず美術史・考古学に関する書籍・雑誌が幅広く揃った伝統ある専門図書館であり、英語以外で書かれた先行研究や古典的な研究等にあたることができた。

(具体的な成果)

1)キリスト教世界とイスラーム世界の接触が中世地中海地域の美術・建築にどのような影響を及ぼしたかという点に関しては、6月にスペインのレイダ大学で開催された中世国際学会に参加し、イベリア半島のキリスト教王国でムスリム工人により建てられ

たいわゆる「ムデハル建築」について英語で発表を行った。続いてリエイダおよびタラゴナで作品の現地調査を行い、その成果を一部盛り込むかたちで、リエイダ大学中世研究サマースクールで口頭発表を行った。合宿形式のサマースクールでは、スペイン、イギリス、アルゼンチンなどで活躍する西洋中世学研究者と有意義な情報交換・意見交換を行うことができた。

2) キリスト教美術とイスラーム美術の接触が「美術史」という学問領域でどのように語られてきたかという点を検証した成果は、まず9月にマドリードで開催された国際学会で口頭発表を行った。「ヨーロッパ＝キリスト教世界」かつ「スペイン＝ヨーロッパ」という19世紀スペイン知識人たちの自己認識のもとでスペイン・イスラームという過去が巧妙に矮小化される一方、「ヨーロッパ」内における独創性、スペインをスペインたらしめるスペイン性の発現の一例としてまさしく「ムデハル美術」が20世紀初頭に注目を集めたという錯綜した状況を、主要な「ムデハル美術」研究を辿りながら提示した。

一方、スペイン以外の地中海地域におけるキリスト教美術とイスラーム美術の接触についても継続的に作品調査と文献収集を行った。その結果、近似した現象が地中海地域全体で観察し得ること、しかしこの地域が国民国家に分断されていく過程で、そうした現象は各国のナショナリズムの言説のなかに取り込まれていったことが明らかとなった。近年のいわゆるグローバル志向の文化史は、国別、言語別に編纂されてきた狭義の美術史を乗り越える契機となり得るが、高度に専門化された先行研究を幅広い地域と年代に渡って把握する難しさを実感した。ともあれ、以上の研究成果の一部は、12月7日に研究滞在先である欧州大学院大学歴史文明学科の研究コロキウムで口頭発表する機会を得た。本頭脳循環プログラムの主宰者である篠原琢先生の欧州大学院大学での発表と日が近かったため、プログラムメンバーの中から篠原琢先生と小田原琳先生の出席を得ることができた。欧州大学院大学での受入教員であるパヴェル・コラーシ博士をはじめ歴史文明学科に所属する研究者たちからも今後の研究にきわめて有益な質問や示唆を得られた。

※ 派遣先 ※ (国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
ヨーロッパ・イタリア、欧州大学院大学、歴史＝文明学部、パヴェル・コラーシ教授	0 日	21 日	308 日	329 日
ヨーロッパ・ハンガリー、中央ヨーロッパ大学、国際会議「The Violence of Memory and the Memory of Violence」	0 日	4 日	0 日	4 日
ヨーロッパ・スペイン・リエイダ大学(国際学会「The 6th International Medieval Meeting Lleida」 「XXI Càtedra de los estudios medievales del Comtat d'Urgell」参加・成果発表・意見交換)	0 日	0 日	13 日	13 日
ヨーロッパ・スペイン・スペイン国立高等科学研究院(国際学会「XVIII Jornadas Internacionales de Historia del Arte」参加・資料調査)	0 日	0 日	5 日	5 日

派遣者⑤の氏名・職名：伊東剛史・准教授

(当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

主に研究対象とする地域は、本研究課題においてヨーロッパ北西部の「境界地域」に位置付けられるイギリスである。比較史と関係史の関係から、派遣者は次の3つのテーマについて、中央ヨーロッパ大学などの海外研究者と連携し、研究を行った。

(ア) ヨーロッパ史の文脈における近代イギリス科学の制度化と専門化

(イ) 帝国経験・植民地経験のイギリス史への還流

(ウ) 多層的ヨーロッパにおける科学拠点の比較史

(具体的な成果)

(ア) は、イギリスにおける自然科学の制度化・専門化を、大陸ヨーロッパとの比較を念頭においたうえで明らかにしようとするものである。CEU所属の Dr. Emese Lafferton (Assistant Prof.) から得られた知見などを取り入れ、研究成果として、Takashi Ito, 'The state and the popularisation of science in Victorian Britain: The Scientific and Literary Societies Act of 1843', *Historia Scientiarum* 25/3 (2016): 216-251 を発表した。同論文により、2016年度日本科学史学会論文賞を受賞(2017年6月に授賞式・内示あり)。

(イ) については、イギリスの帝国的展開が、科学研究に及ぼした影響を明らかにすることが大きな目標となる。そこで、報告者は19世紀イギリスを代表する科学者としてチャールズ・ダーウィンを選び、ダーウィンの帝国経験が彼の科学研究に及ぼした影響を分析した。この成果は、伊東剛史、後藤はる美編『痛みと感情のイギリス史』(東京外国語大学出版会、2017年)としてまとめられた。

(ウ) は、ヨーロッパ域外も含めた様々な科学研究拠点の形成を、比較と関連性の視点から明らかにすることである。CEU所属の Marianna Szczygielska (Ph.D. candidate) とともに、マクマスター大学(カナダ)で開催された国際ワークショップ Zoo Studies and A New Humanities に参加した。この成果は、国際共著論集としてまとめられ、トロント大学出版会より出版予定である。

派遣先 (国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成26年度	平成27年度	平成28年度	
中央ヨーロッパ大学・歴史学部・バラージュ・トレンチェーニイ教授	0日	175日	140日	315日
ヨーロッパ・ポーランド、国際文化センター、共同セミナー「Europe Seen from Abroad」	0日	2日	0日	2日
ヨーロッパ・ドイツ、フランクフルト動物園・ゼンケンベルク博物館・聖書博物館(資	0日	4日	0日	4日

料調査)				
ヨーロッパ・英国、ブリティッシュ・ライ ブラリー (資料調査)	0日	1日	3日	4日

6. 研究者の招へい実績（計画）

【招へい実績（計画）】

年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	合計
招へい人数	2 人	8 人 (2 人)	7 人 (3 人)	12 人

※当該年度は実績、次年度以降は計画している人数を記載

【本年度の招へい実績】

招へい者①の氏名・職名：バラージュ・トレンチャーニイ・教授

<p>（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）</p> <p>バラージュ・トレンチャーニイ教授は、ヨーロッパの境界地域のネーション形成、ナショナリズム研究について指導的な研究者である。ヨーロッパの 16 言語に通じ、各国の史学史に詳しく、いくつもの共同研究を通じて、研究ネットワークを構築している。本研究では、主に理論的な諸問題、および比較史の方法の問題を中心に担当する。</p> <p>（具体的な成果）</p> <p>トレンチャーニイ教授は 3 月 25 日に本学で行われた国際会議で「中・東欧における自由主義のトランスナショナルな歴史に向けて」と題する報告を行った。この報告は、自由主義思想によって構築されたヨーロッパ史の規範を批判的に検討するための枠組みを提供するものとなった。中央ヨーロッパ大学で行われた国際会議ではコメンテータとして比較史の可能性を示した。トレンチャーニイ教授は、本事業の開始時から、研究計画の策定に携わり、中央ヨーロッパ大学において、本事業を推進する中心的役割をになった。2017 年 2 月に行われた総括会議では、近世から現代に至る長い期間について、本研究事業に見通しをあたえる報告を行った。</p>				
招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
中央ヨーロッパ大学、歴史学部、ハンガリー 篠原琢（東京外国語大学）	0 日	4 日	25 日	29 日

招へい者②の氏名・職名：パヴェル・コラーシ・教授

<p>（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）</p> <p>ヨーロッパ現代史、とりわけ冷戦期の歴史を東西にまたがって叙述する枠組みの構想を方法論的、概念的に発展させる中軸となる。また、欧州大学院大学と東京外国語大学との研究者循環に中心的役割を果たす。</p> <p>（具体的な成果）</p> <p>東京外国語大学において行われた国際会議において、パヴェル・コラーシ氏の報告は、ヨーロッパ史概念から「東」がもっとも疎外された冷戦期について、死刑制度に注目しながら、国家暴力の行使という観点から考えた場合の、「東」を包括したヨーロッパ史</p>				
---	--	--	--	--

叙述の可能性を提起した。本年度は総括会議に出席し、東欧社会主義体制をヨーロッパ史のなかに有機的に位置づけるための提言を行った。これらの報告は、本プロジェクトを進める上で、本質的に重要な貢献となった。EUI においては、本事業を推進する中核となった。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
欧州大学院大学、歴史＝文明学部、イタリア 篠原琢（東京外国語大学）	5 日	1 日	7 日	13 日

招へい者⑥の氏名・職名：マティアス・リードル・教授

（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）

ヨーロッパ中世、近世におけるヨーロッパ史概念を政治思想史研究に即して解明する。中央ヨーロッパ大学と東京外国語大学との研究者循環に中心的役割を果たす。

（具体的な成果）

東京外国語大学において行われた国際会議において、マティアス・リードル氏の報告は、中近世の政治思想史に即して、ヨーロッパ史における「西」の意味づけを明らかにした。

2016 年 3 月に中央ヨーロッパ大学歴史学部で行われた本事業主催の国際会議の計画・組織・実施に中心的役割を果たした。

2017 年 2 月に行われた総括会議では、ヨーロッパ史における「東」と「西」の観念を、ヨーロッパ政治思想史のなかで検討し、ヨーロッパ史を構築する空間概念について論じて、本事業に本質的な貢献を行った。中央ヨーロッパ大学歴史学部学部長として、本事業の中心となるとともに、本学と中央ヨーロッパ大学との学術協定を締結するのに中心的な役割を果たした。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
中央ヨーロッパ大学、歴史学部、ハンガリー 篠原琢（東京外国語大学）	6 日	2 日	11 日	19 日

招へい者④の氏名・職名：ピーター・ジャドソン・教授

（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）

ジャドソン教授は、19 世紀ハプスブルク帝国史研究、19 世紀のリベラリズム研究に革新をもたらす研究を行ってきた。現在は、欧州大学院大学で広く近代ヨーロッパ比較史を担当している。19 世紀のヨーロッパ史理解は、ヨーロッパ史の再検討に鍵となる分野であり、ジャドソン教授を招いての共同研究は、本研究に中心軸を与える。本研究では主に近代史の部分を担当する。

(具体的な成果)				
2016年5月に行われた国際会議、「帝国とナショナリズム」で中心的役割を果たし、本事業計画のうち、19世紀の国民社会の形成と帝国秩序に関する研究を大きく進展させた。また、欧州大学院大学歴史文明学部学部長として、本学と欧州大学院大学との学術交流協定の準備に中心的な役割を果たしている。				
招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
欧州大学院大学・歴史文明学部、イタリア 篠原琢（東京外国語大学）	0 日	0 日	8 日	8 日

招へい者⑫の氏名・職名：ルーシー・ライオル・教授

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)				
欧州大学院大学の窓口役であるパヴェル・コラーシ教授と協議して、平成 28 年度に開催する国際会議の報告者を決めた。本研究計画は順調に遂行されているが、研究対象地域が、現在までヨーロッパの東部に若干偏っているところから、イタリアを中心とする南欧史が専門のライアル教授を招聘することとした。				
(具体的な成果)				
ライアル教授は、2016年5月に行われた国際会議「帝国とナショナリズム」で、ジャドソン教授とともに基調報告を行い、ヨーロッパ周縁部における帝国秩序の問題について、研究事業に新しい領野を開いた。2017年2月に行われた総括会議では、グローバル史における中心と周縁の問題について、批判的な報告を行い、本研究事業の成果を確認すると同時に、新しい課題を提示した。				
招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
欧州大学院大学・歴史文明学部、イタリア 篠原琢（東京外国語大学）	0 日	0 日	14 日	14 日

招へい者⑬の氏名・職名：カルステン・ヴィルケ・教授

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)			
カルステン・ヴィルケ教授は、中央ヨーロッパのユダヤ文化・ユダヤ人史の専門家である。ヨーロッパ史の境界領域を考えるうえでユダヤ教徒・ユダヤ人の歴史は非常に重要であり、研究のさまざまな局面で、その問題に直面してきたが、従来は、当該領域の専門家の協力が得られなかった。研究の進展のなかで、ユダヤ文化・ユダヤ人史の専門家の協力が不可欠となり、今回、中央ヨーロッパ大学歴史学部学部長のマティアス・リード教授、および本学との連絡窓口であるバラージュ・トレンチャーニイ准教授と協議			

して、ヴィルケ教授の新たに招聘を決めた。

(具体的な成果)

ヴィルケ教授は、2016年3月に中央ヨーロッパ大学で開催された国際会議で、篠原の研究報告をにコメントを行い、研究事業の方向性について助言を行った。2016年7月に京都大学と東京外国語大学行われた国際会議で、それぞれ「ヨーロッパ・ユダヤ人史における東と西」、「オーストリア帝国におけるユダヤ人史」という報告を行い、境界領域としてのユダヤ人史というテーマについて、研究事業の枠組みを示した。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
中央ヨーロッパ大学・歴史学部、ハンガリー 篠原琢（東京外国語大学）	0 日	0 日	15 日	10 日

招へい者⑭の氏名・職名：ヤン・ヘニングス・准教授

(当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

ヤン・ヘニングス准教授は、近世のヨーロッパとロシアの交渉史を専門としている。異なる法文化と政治的正統性に支えられているロシアとヨーロッパという二つの世界の交渉は、ヨーロッパ史の境界領域を検討する上で、非常に重要な主題である。ヘニングス准教授は、中央ヨーロッパ大学に本学から派遣された若手研究者と研究交流や、本研究計画によるブダペシュトのワークショップへの参加などの実績がある。今回、本研究課題を総括する国際会議の開催にあたり、中央ヨーロッパ大学歴史学部学部長のマティアス・リードル教授より推薦を受け、国際会議での報告のために新たに招聘を決めた。

(具体的な成果)

ヘニングス准教授は、2017年2月に行われた総括会議で、実証研究に基づいて、ロシアとオスマン帝国との外交交渉に現れた法的規範の差異、相互認識の方法などについて、鮮やかにその実像を示した。この研究報告は、本研究事業を支える重要な具体的・実証的研究となった。

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
中央ヨーロッパ大学・歴史学部、ハンガリー 篠原琢（東京外国語大学）	0 日	0 日	11 日	11 日

7. 翌年度の補助事業の遂行に関する計画

該当せず。

※ 補助事業が完了せずに国の会計年度が終了した場合における実績報告書には、翌年度の補助事業の遂行に関する計画を附記すること。